

台湾茶の歴史を訪ねる 第十三回

# (13) 鉄観音茶は一体いつメジャーになったのか



須賀 努 (コラムニスト/茶旅人)

前回は鉄観音茶の歴史を中心に辿ってみたが、今回は福建省における、特に輸出の歴史、そして『一体いつ、なぜ鉄観音茶がメジャーブランドとなったのか』などについて追ってみた。また台湾における木柵以外の鉄観音茶事情にも少し触れてみたい。

## 鉄観音茶の輸出基地 厦門

鉄観音茶を産出する安溪、その茶葉の多くが輸出に回されたが、その輸出基地は、安溪にほど近い厦門が中心だったと考えられる。厦門は1842年アヘン戦争の結果開港され、特に1860年頃からは茶葉の主要基地として栄えた。1870年代以降、茶貿易に関わる多くの茶商が厦門に店を開き、主に東南アジアへの茶葉輸出に尽力した。台湾で売れ残った烏龍茶が回ってきて、ここで花を交せて東南アジアへ売り出したと言われているのも1873年頃のことだった。

1923年、厦門に茶業同業公会が設立されたが、林金泰、林和泰、林奇苑、王堯陽など40以上の茶業者が参加しており、1920-30年代は厦門茶業の黄金期とも呼ばれている。現在の厦門には昔の建築物はほぼ残っていないが、港に近い鎮邦路、水仙路などに大きな店舗を構えていたと聞く。ただ1937年の日中戦争開始後の混乱期には、店舗の閉鎖、茶葉輸出の停止を余儀なくされてしまう。

新中国が成立すると、当初は厦門などの茶行はこれまで通り茶の輸出を独自に行っていたが、1954年に中国茶業公司福建省分公司厦門事務所が開設されると徐々に国営化が進み、1956年には張源美や林奇苑などの有名茶行がそこに吸収され、個々の茶商の時代は基本的に終焉を迎えた。茶商が復活するのは1980年代を待たなければな



厦門 現在の鎮邦路付近

らない。

これまで見てきた厦門の茶業だが、その中で鉄観音茶が占める割合はどの程度あったのだろうか。正直統計的なものは見当たらず、何とも言い難いのだが、様々な意見を集約すると、『鉄観音茶の輸出量はそれほど多くはなかった』ということになる。少なくとも1920年代までは、厦門で扱う茶葉の半分以上は武夷山などの閩北茶であったと言われており、また閩南烏龍茶との表現はあっても、鉄観音茶という名称は見当たらない。鉄観音はやはりマイナーな茶であった、ということだろうか。

先日厦門で元国営厦門茶廠から『中国烏龍茶』という本をもらった。この本の著者は張水存氏。長年厦門茶廠で茶作りに励み、退職後に集めた資



厦門 厦門茶廠に残る鉄観音茶

料を基に、この壮大なテーマを書き上げ、2015年に亡くなったという。実は張氏はミャンマー発祥の大茶商、張源美の親族で、1950年代に厦門支店の責任者をしていた人でもあり、その人生はかなり波乱に富んでおり、鉄観音茶とも所縁がある。

『中国烏龍茶』を見ると、1937年の『安溪茶業調査』によれば、全安溪に植えられた品種構成は『烏龍35%、鉄観音28%、梅占18%、奇蘭10%』となっており、鉄観音もそれなりにあったことは分かるが、やはり産量自体は少なかったのだろう。これが60年代以降になると、鉄観音、本山、毛蟹、黄旦などの優良品種を選ぶようになっており、これがその後の鉄観音の隆盛の基礎になっているようだ。

### 鉄観音茶は有名になったが

文化大革命期には、観音信仰の排除などのため、鉄観音茶の名称は強制的に『鉄冠音』に変更された(大紅袍も『大紅岩』に変更)という。これを見る限り、鉄観音は既に十分認知された茶であったことは分かる。だが当時を知る関係者によれば『当時茶は輸出が基本で、正直質よりも量、そして低価格が重んじられたため、実際には色種が中心だった』と説明され、何となく納得してしまった。

そして国営化、文革の影響を受け、残念ながら



1958年、中国茶業会社が商標登録

茶業自体の進歩はなく、鉄観音茶を高級ブランドとして売り出すことなど考えられなかった。因みに『鉄観音』というブランド名は1958年、中国茶業会社が商標登録していたとも聞かされ、誰もが使える名称ではなかったらしい(1978年まで)。東南アジアでも福建、広東系華人の一部が、『観音信仰』の影響もあり、この名称を好んで買ったことはあったようだが、全体的には停滞を免れなかった。

だが1970年代後半、厦門から日本に烏龍茶の輸出が始まり、これが瞬く間に普及していく。伊藤園の缶入り烏龍茶、サントリー烏龍茶などはとくに有名で、その後も長く日本人に愛飲されているのはご存知の通りだ。実は福建烏龍茶の隆盛は日本市場の開拓によって作られたのだと、当時の関係者は懐かしそうに語る。

そして1986年のパナマ万博での受賞が1つのきっかけとなり『鉄観音』が本格的にブランド化され、日本人でも誰もが知る銘柄となっていく。当時貧しかった福建の地方政府はこの世界的なブランドとなった鉄観音を利用して、村々の所得向上を目指して、各茶商に対して『鉄観音』の看板



厦門 現在の厦門茶葉進出口公司



安溪 压茶機使用禁止の横断幕

を店に掛けて推奨すれば補助金を出す、といった大胆な政策を取り、短期間にその認知度向上、販売促進、ブランド化に成功したと聞いている。

尚、安溪鉄観音が最近軽発酵になったのは、厦門茶葉進出口公司の王森総経理助理によれば、『90年代後半、台湾の天仁茶業（中国では天福茶業）が中国に進出したことが大きく影響している』と説明する。当時天福が持ち込んだ台湾高山茶は、茶葉もきれいで、軽発酵、香りがよく好評を博した。安溪はこれをモデルとして、鉄観音茶の軽発酵化を進めていき、更なる市場拡大を目指しているうちに、いつの間にか極めて緑茶に近いものが出てきたのだという。1996年の1年間で、鉄観音茶軽発酵化が一気に進んだ、との証言もあったが、基本的には2000年以降急速に緑化したと言われている。

最近、特に2000年以降は需要が膨らみ過ぎて、生産の簡素化が起こり、鉄観音茶のブランドイメージが急落していく。軽発酵化による品質の低下（萎凋不足など）が、価格の低下を招き、収入が減少した茶農家は、品質向上ではなく、産量の増加でこれを補おうとして、更に質の悪いものを市場に出してしまうという悪循環が繰り返されている。

更には俗に豆腐機（压茶機）と呼ばれる機械の導入を奨励したことにより、茶葉も茎も一緒に製茶

してしまい、これも品質悪化の要因となっている。2017年に安溪では豆腐機の使用を禁止する指令を政府が出しているが、元々同じ政府が推奨していた物だから、手のひら返しの対応だとの批判も多くあり、また一度楽をしたらもう元には戻れない、若者は伝統製法が分からないなど、現場は混乱しているのが正直な現状ではないだろうか。

### 香港における鉄観音茶

中国茶の集積地である香港、その地の鉄観音茶の取り扱い状況も一つの参考になるかと思い、香港の老舗茶行を訪ねてみた。1936年に厦門から香港に進出し、現在も上環に渋い店舗を構えてい



香港 堯陽茶行



香港 堯陽茶行の茶缶



香港 茗香茶莊の陳さん親子

る堯陽茶行。彼らは元々、安溪西坪の出であり、鉄観音茶とは切っても切れない縁がある。

そこで旧知の3代目王氏から聞いた話はやはりこれまでの歴史調査を裏付ける内容だった。『鉄観音茶の取扱量は1970年代まで非常に少なく、色種が中心だったが、80年代以降、需要が急激に伸びていった。だから70年代までは手で炭焙煎をしていたが、その後は需要に対応するため、一般向けの茶は電炉に切り替えた』と言う。

また九龍城で1963年に開業した茗香茶莊の2代目陳氏に開業当時扱っていたお茶を聞くと『当時は中国国内からの茶葉輸出はかなり制限されており、香港では指定業者が代理店となり割り当てをもらっていた。一般の茶莊は台湾の包種茶や、ベトナム、インドネシア、タイなどから入ってくる様々な茶を売るしかなかった。その中に鉄観音茶は殆どなかった』と言う。

更には『鉄観音が著名になったのは80年代。初めて安溪に烏龍茶の買付に行ったのは1983年だから、その後のことだろう。但し鉄観音は一部の愛好家には以前から評判が良く、網の目を掻い潜って密輸されていた。それが香港をはじめ、台湾などの華人に流通したのだが、その値段は非常に高く、かなり珍重されていた』との話もあった。

一方1952年、当時の大茶商、張源美と友人の楊

氏が始めた福建茶行の2代目、楊庭輝氏は『鉄観音茶の需要は常にあり、開業以来鉄観音が商品の中心だった』と証言する。この茶莊には、今でも古い茶箱や茶缶が残されているが、いずれも『安溪鉄観音茶王』などの名称が書かれている。また今でも小包装の茶をタイなどに輸出していると言います。『東南アジア華人は、小分けの鉄観音茶を好んで買っていた』と話す。

また潮仙工夫茶で有名なスワトウで、その工夫茶芸の伝承人として名高い鄭惠豊氏に聞いてみると、潮州は鳳凰単叢茶で名高いがその産量は少なく、お茶の消費量が多い潮仙地区では元々福建茶を飲んでおり、1980年代以降鉄観音茶を使うこと



香港 福建茶行に残る木の茶箱

が多くなったという。『鳳凰単叢は華僑など親戚への贈り物、普段は福建茶を小さな碗で淹れ、小さな茶杯で飲むのがこのあたりの流儀だ』との説明は面白く、また現在にもつながる話だ。

## 木柵鉄観音の特徴

前回書ききれなかったので、安溪と木柵の鉄観音茶の違いについても述べておきたい。台湾鉄観音茶が高発酵であり、一番のポイントはその焙煎にあると聞き、実際にその焙煎を見てみたいと思い、前回紹介した木柵張協興の張丁頂氏の息子、張智揚氏にお願いして、彼の作業場を見せてもらうべく訪ねた。そこは見晴らしの良い高台で、観光シーズンの週末には来客も多いという。

茶葉は摘み方が極めて重要だという。熟成された葉でなければ、その後の発酵、焙煎の過程で真価を発揮できない。安溪でも1か月の製茶期間の内、最初は黄金桂、それから本山などを一週間ごとに摘み、最後に鉄観音を摘むのが一般的だった(現在は全てまとめて鉄観音と称して作っているケースが多いが)。

製茶後1か月ほど寝かせたものを焙煎するという。その焙煎室に入ると、空気が抜ける穴など様々な工夫がなされている。まずは穴で火をおこし、その火を消してその温かみで焙煎を行う。こ

れを陰火(温火)と言っていた。タイミングを見ながら何度か繰り返すと、濃厚な味わいが出るというのだ。

発酵を十分にさせないと、強い焙煎を掛けることは出来ない。現代はなぜか清香ブームであり、消費者の要求に合わせて、低発酵茶が市場の主流となっている。安溪鉄観音など、今やその多くが発酵不足と言われ、緑緑したその茶葉で茶を淹れると、腹痛を起こすことさえあるというのだ。焙煎も殆どかけられず、もしかければ香りは飛んでしまうという。ただ一部の伝統製法を守っている茶廠の茶作りを見ていると、素人目には木柵も安溪もそれほど違いはないように見える。

現在では木柵鉄観音の産量は少なく、茶畑も殆ど見られない状況だ。原料は坪林辺りから持ってきて作られているとも言い、中には金萱など他品種で鉄観音茶を作っているケースが増えているという。また福寿山、宜蘭、南澳などにも少量の鉄観音茶が植えられているが、ブームを起こすような産量は得られていない。

前回の高山茶のところで既に紹介した、福寿山農場など高山でも、40年ほど前に鉄観音品種が植えられており、現在も生産されている。夏にはこの茶葉を使い、紅茶を生産『鉄観音紅茶』などという名称で売り出されているのを目にすることもある。台湾の鉄観音は決して木柵だけではないが、その歴史を通して見ても、『台湾鉄観音茶がメジャーになったことは一度もない』と言ってしまうのも、それは言い過ぎではないだろう。

尚、現在台湾茶の世界では、どこでも品評会が開かれており、木柵鉄観音も例外ではないが、最近ここで入賞するためには、発酵を軽くする、焙煎を弱くするなど、凍頂烏龍茶などと同様の傾向が主流になっていると嘆く声を幾つか聞いている。勿論安溪ほどには軽くはなっていないものの、『消費者のニーズ』という言葉が少し危惧される現状もあるようだ。



木柵張協興 焙煎作業

## 石門で作られた鉄観音茶

台湾で鉄観音茶についてヒアリングしている内に、『石門には行ったのか?』と聞かれてハッとした。台湾で石門と聞けばまずは石門水庫が思い浮かぶが、確か日本時代に一大茶産地だった淡水郡にも石門があった。調べてみるとそこには『石門鉄観音茶』という名称が今も残っている。この鉄観音茶はどんなもので、如何なる歴史があるのだろうか。

基隆から北の海岸沿いを車は走る。そして丘を登り始めると、草里製茶廠が見え、3代目謝国村氏(85歳)が元気に迎えてくれた。日本時代に初代の祖父、謝泉氏が茶業を始めたという。里長(村長)も務め、かつ1920年代、台北州の巡回教師に任命され、南港、汐止、石碇を巡回して、製茶技術を教えるほどの人だった。

尚、現在謝氏の家には巡回教師任命書の他、場所や訪ねた人物が記された具体的な巡回記録が保管されている。その生徒名の中には、何と台湾包種茶の開発者と言われている南港の魏静時の名前があり、若干困惑を覚える。既に有名人だった魏氏が謝氏から何かを教わったのだろうか。謝氏は『祖父の殺青技術が高かったからかな』というが、真実は全く分からない。

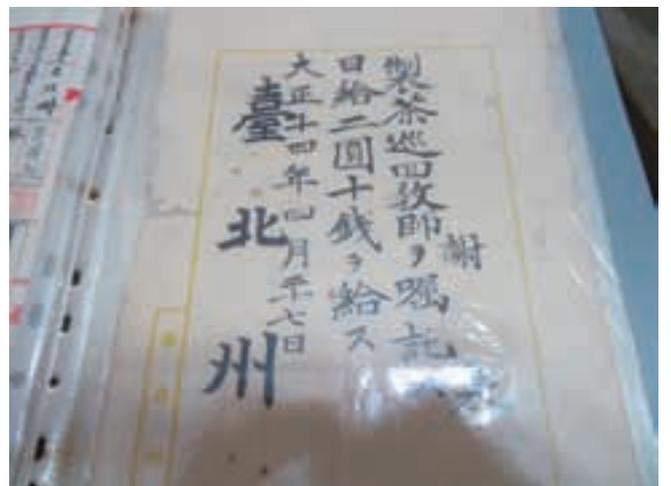


石門 草里製茶廠3代目謝国村氏

祖父、謝泉の時代、鉄観音という文字はどこにも出てこない。更に2代目の父、謝木得氏は1930年前後に玄米コンテストで入賞しており、これも記録が残っているが、ここではお茶すら出てこない。謝氏によれば、硬枝紅心という品種がこの付近にはたくさん植えられており、1960年代までは紅茶製造(阿里磅紅茶などの名称)に盛んに使われていたというから、茶樹も残っていたはずだ。ただ祖父から父に渡された茶畑は30ヘクタールだったが、謝氏自身が父親から引き継いだ茶畑は僅か7ヘクタール、その頃はもう台湾茶の輸出は頭打ちになり、斜陽産業だっただろう。

茶業を止めるかどうかの瀬戸際にあった1980年頃、茶業改良場より鉄観音茶製造の話が持ち込まれた。硬枝紅心という品種が鉄観音茶に向いていると言われ、製茶指導も行われた。製法は木柵とほぼ同じだという。この時実際に製茶を行い、石門鉄観音茶の知名度向上に奔走したのが、この地区の販売班長だった3代目謝氏。台湾各地の展示会に出展し、盛んに宣伝を行い、徐々に認知されるようになっていく。ティバッグもいち早く取り入れ、最新の機械を農会で購入するなど、積極的な姿勢が見られた。

現在木柵などで作られる鉄観音茶も、鉄観音品種が減っていき、金萱や翠玉などの別品種で作ら



石門 謝泉氏の巡回教師任命書

れるケースが増えている。その代替品種として、なぜ金萱や翠玉が使われるのだろうか。実は品種改良で出来た金萱の父方、翠玉の母方は共に硬枝紅心であり、これは偶然ではないだろう。鉄観音茶製造において、硬枝紅心を使うことが妥当だということを証明しているのかもしれない。

石門における1980年以降の内需を睨んだ鉄観音茶作り。この経費はどこから出たのだろうか。政府の支援もあっただろうが、もう一つ重要な資金源があったようだ。帰りに海辺の道を走っていると、チラッと『核電廠』という文字が見えた。ここは1979年頃、台湾で初めて原子力発電所が

作られた場所でもあった。恐らくはその時に受けた補償金などを元手に、地場産業の発展を目指したのではないかと勝手に推測する。現在台湾では原発廃止を模索しており、同時にこの地の鉄観音茶製造にも一度区切りがつくかもしれない。

2回に渡り見てきた鉄観音茶の歴史。日本人なら誰でも知っているブランド茶だが、こうして見ると兩岸共に意外なほどにメジャー商品ではなかったことが分かる。茶の歴史調査においては、本来の歴史と後世何らかの事情によって語られる歴史の差、というものを感じることが多いが、鉄観音茶はその代表銘柄であるかもしれない。